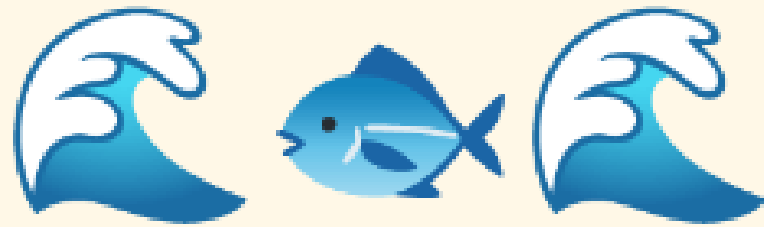




# さいごの夢をみる魚

ある海の、ある物語

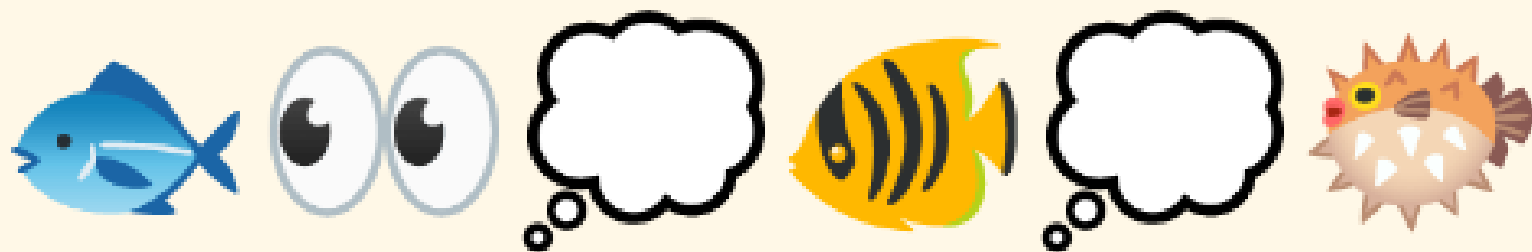


むかしむかし、**深い深い海の底**に、  
一匹の小さな魚が住んでいました。



その魚には、不思議な力がありました。

他の魚の夢の中に入る ことができたのです。



魚は毎晩、誰かの夢に遊びに行きました。

楽しい夢、悲しい夢、不思議な夢。

どんな夢も、魚にとっては宝物でした。



ある日、魚は気づきました。

海の仲間たちの夢が、

だんだん暗くなっていることに。



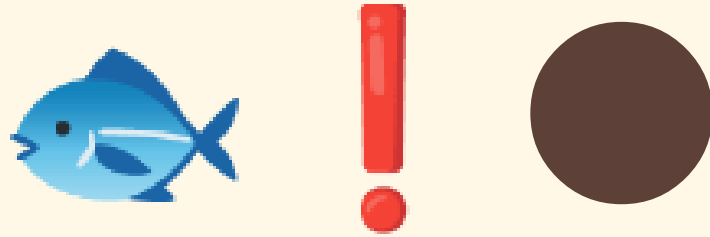
「最近、怖い夢ばかり見るんだ...」



「私も...海が暗くなる夢...」



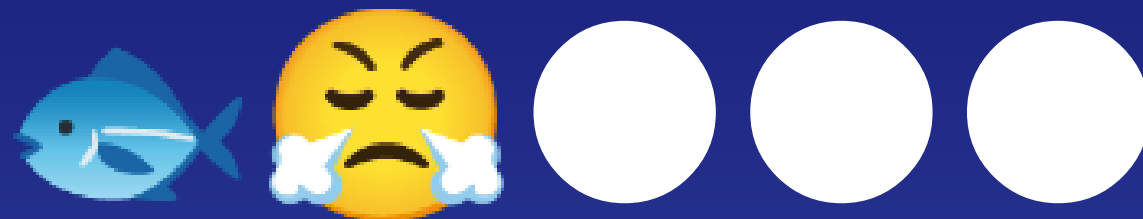
「みんな、何かを恐れている」



魚は決心しました。

「みんなの怖い夢を、僕が食べよう」

そうすれば、みんな安心して眠れるから。

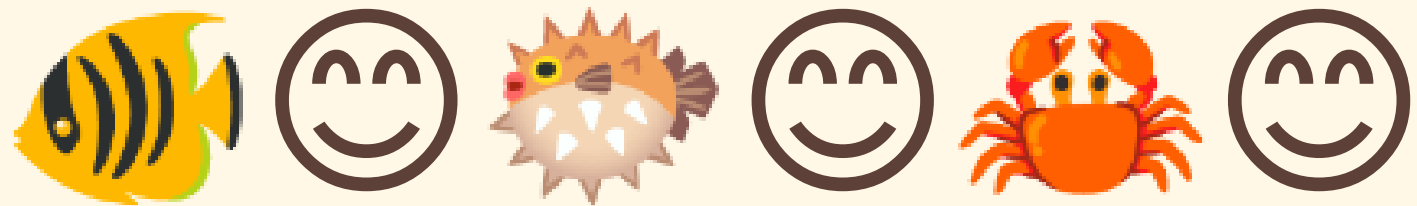


その夜から、魚は**悪い夢を食べ始めました。**

真っ黒な夢。冷たい夢。悲しい夢。

全部、全部、飲み込みました。





すると、海の仲間たちは笑顔を取り戻しました。

「最近、いい夢ばかり見るよ！」

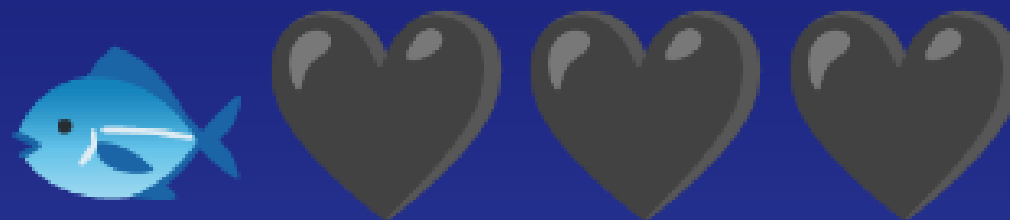
みんな、とても幸せそうでした。



でも、魚は気づきました。

食べた悪い夢は、消えたんじゃない。

自分の中に、溜まっていたのです。



魚の体は、**だんだん重くなりました。**

泳ぐことも、息をすることも、辛くなりました。

それでも魚は、**悪い夢を食べ続けました。**



「おや、小さな魚よ。どうしたんだい？」



古い亀が、魚に声をかけました。



「僕は...みんなの悪い夢を食べているんです。

でも、もう体が限界で...」



「なぜ、そんなことを？」



「みんなに、幸せでいてほしいから」



「小さな魚よ。

悪い夢は、悪いものじゃないんだよ」

魚は驚きました。



「怖い夢を見るから、勇気が生まれる。

悲しい夢を見るから、優しさを知る。

**夢は、心が成長するための栄養なんだ」**



魚は、ハッとしました。

僕は、みんなから大切なものを奪っていたのかもしれない。





「まだ間に合うよ。

夢は、返すことができるんだ」



「どうすれば...？」

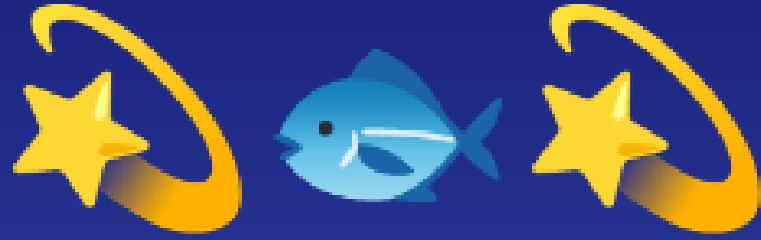


「お前自身が、最後の夢を見るんだ」



その夜、魚は目を閉じました。

生まれて初めて、自分のための夢を見ました。



夢の中で、魚の体から光が溢れ出しました。

黒い夢たちが、色とりどりの光に変わって、

海中に散らばっていきました。



朝が来ると、海の仲間たちは不思議な夢を見たと話  
しました。

「怖かったけど、なんだか勇気が出た」

「悲しかったけど、温かい気持ちになった」



魚の体は、すっかり軽くなっていました。

もう、悪い夢を食べる必要はありません。

だって、悪い夢なんて、最初からなかったのですから。



それから、魚は夢の中を旅しました。

でも今度は、夢を食べるためじゃなく、

一緒に夢を見るために。

どんな夢も、あなたの心の一部です。

怖い夢も、悲しい夢も、

あなたを強くするために来てくれたのかもしれない。

おしまい





今夜、どんな夢を見ますか？

- さいごの夢をみる魚 -